

2016年度秋季大会のご報告<2016年11月27日（日）開催>

2016年11月27日（日）、立命館大学衣笠キャンパスの以学館において、2016年度立命館学校教育研究会秋季大会が開催されました。今年度も学内外から約100名の方の参加があり、その中には、来年度に教師1年目となる学生の皆さんの姿も多く見られました。

全体会では、町田委員（衣笠教職支援センター主任）より今年度の教員採用試験の動向についてご報告いただき、また森田委員（立命館大学大学院教職研究科設置委員会事務局長）からは、2017年4月に開設する立命館大学大学院教職研究科の特徴について紹介していただきました。

分科会は5つのテーマに分かれ、参加者各々が興味・関心のある分科会を選び、いずれの教室でも、講師の方を中心に熱心に議論が繰り広げられました。（各分科会の内容は次ページ以降の報告をご参照下さい。）

分科会のあとは、今年度ならではの企画として、2016年4月に開設した平井嘉一郎記念図書館の見学ツアーを行い、最新の図書館設備や、様々な学びの工夫が施された施設を見学しました。

懇親会では、様々な年代の参加者が親睦を深めることができました。分科会に引き続き、多くの学生が参加し、これから教壇に立つ上での不安や疑問点を先輩教員に相談し、アドバイスや励ましの言葉を受ける様子が見られました。最後には、岡本副会長が挨拶の中で、「今後は現場の先生方が抱えておられる悩みを相談できるような企画を考えていきたい」と、研究会に対する今後の期待と抱負について述べられ、解散となりました。



■第1分科会 「学校と博物館をつなぐ」

講師：鈴木 康二 氏（公益財団法人滋賀県文化財保護協会 副主幹）

第1分科会は「学校と博物館をつなぐ」というテーマで開催され、公益財団法人滋賀県文化財保護協会の鈴木康二さんに、学校教育現場における博物館資料（特に考古資料）の活用事例についてご紹介いただきながら、13名の参加者が実際に考古資料に触れてみるというワークショップを実施していただいた。

参加者が体験したワークショップは、鈴木さんが実際に学校で子どもたちに行っているものである。当日のワークショップでは、縄文時代の出土品3点に直接触れることができた。

まずは、袋に入ったセタシジミを、人差し指と親指とでつまんで大事に取り出す。そうすると、指に白い粉がつくが、これは資料が少しずつ壊れていっていることを示している。そのような話をすると子どもたちは以降、考古資料を丁寧に扱うそうだ。ただ、それでも、考古資料の中には収蔵庫の奥にしまわれてそのまま眠ってしまいかねないものも多数あり、それくらいなら実際に子どもたちに触れてもらうことの方が重要であるとお考えのもと、学校に貸し出し可能な、触ってもらえる考古資料のリスト化を進めているという。

続いて、袋から取り出したセタシジミを各自がスケッチする。手に持って重さを感じてもらってもいい、においをかいでもらってもいい、そのねらいは、展示ケースに入っている考古資料ではできないような体験をしてもらいたいとのことであった。スケッチをしたあと、鈴木さんから、今のシジミと比べてどうか？それはなぜか？と問いかけが続く。いろいろな答えが考えられるが、正解はなく、考えることが重要であるという。

セタシジミの次は、石鏃、そして縄文土器の破片へと続いていく。同様に、それぞれ重さを感じ、においをかぎながら、スケッチをすることで、考古資料に存分に触れる。縄文土器の破片は、2種類のもものが班毎に配布され、比べてみるようにという問いかけがあった。各班は2種類の破片の違いに目がいったが、鈴木さんは、同じ部分に気づくことも重要であることを指摘された。色や模様の有無、厚み等が違うのだが、二つとも同じ縄文土器。教科書の縄文土器の記述がかなり一面的であることもみえてくる、実は高度な内容である。



このようなワークショップを通して、鈴木さんと参加者との質疑応答も行われた。印象的だったのは、教科書は間違っていると断言され、実際に出土した多様な資料を示しながら考えることを促す鈴木さんと、しかしながら、学校では教科書に即して「正解」を教える教育が行われているので、かえって子どもたちを当惑させる場面も出てくるのではないかという参加者とのやり取りであった。とりわけ歴史に関しては単なる暗記科目とされがちな社会科ではあるが、そうではなくて多様に考えることが重要な科目であるということがよく理解できた分科会であったと思う。

(文責：四方 利明)

■第2分科会 「めざせ起業家～専門高校でのキャリア教育とアクティブラーニング～」

講師：児玉 敏男 氏（兵庫県立氷上高等学校 校長）

第2分科会では、「めざせ起業家～専門高校でのキャリア教育とアクティブラーニング～」と題して、兵庫県立氷上高等学校校長の児玉敏男氏による同校のキャリア教育及び実践成果の紹介と、アントレプレナー育成教育の取り組みや、将来にわたる人材育成の在り方等について、分かり易い映像を見ながら熱くお話いただいた。

全国的には女子バレーボール部の活躍で有名な氷上高校は、農業科と商業科を併置する全国でも珍しい専門学科高校で、1年生からそれぞれの専門教育を受けることができる。日々の授業で本物の「本者」、すなわち社会で活躍するその道の専門家や職人・技術者・技能者と交流できる機会を多く持ち、3年間をかけて科学性・社会性・指導性を備えた人材の育成に力を入れてきた。農業科と商業科を併せ持つことで、「生産」・「加工」・「販売」・「サービス」を一体的に学び、地域社会に貢献する「6次産業化」の実現を目指した取り組みを進めている。また、60年近い歴史を持つ2年生全員の就業体験実習（長野県や丹波地域での7泊8日ファームステイ等）が、生徒を社会人として精神的に大きく成長させてきたが、その仕組みや仕掛け・工夫について、余すことなくご教示頂いた。

参加者は、中学校教員・高校教員・定時制高校の特別支援教育担当者に加え、高校の管理職や教育委員会指導主事、元教育長歴任者など多様な立場のメンバーであったが、校種や地域の違いを全く感じさせずに意見交換や議論が進んだ。特に本年度教採試験に合格し、この第2分科会に参加した現役学生3名にとっては、学校現場の現実的・実践的な話題と空気に触れ、大きな刺激と成果を受けたに違いない。

就業体験を成功させるためには「フェイス to フェイスが大切」、「どんな力を付けさせたいかをはっきり伝える」、「起業家精神育成に必要なのはメンタル面の強化」、「しっかりとした儲けに対する考え方の育成」が必要など、現実と現実の先を見る目の大切さを力説頂いた。

参加者からは、「高校から見て、中学校や小学校に求めるキャリア教育の要素は何か」や



「社会が激しく変化する中、どのように地域創生し産業人を育てるのか」などの質問があげられた。また、今後のキャリア教育を更に推し進める為には、学校現場だけではなく、地域行政や大学等の研究機関などとの連携が不可欠である、などの意見を聞くことができた。豊富な資料と映像をご用意され、熱心に語っていただいた児玉氏に感謝申し上げます。

（文責：岡本 真一）

■第3分科会 「Kokorozashi あなたが未来を創る

～教育に生きることを現場から考える～

講師：村上 幸一 氏（NPO 法人 EDU・LABO 教育イノベーション開発研究所 代表理事）

第3分科会では、講師の先生から、参加者に合った話をしたいとのご意向があり、まずは参加者全員が自己紹介を行った。

そして、「学校の組織において、よりよい成果を上げるためには個と組織のリフレクション（内省）による仕事・生き方への変革が必要である。」という視点から、つぎの5つの大切さについてお話いただいた。

- 1 教育は万能ではない。しかし希望である。
- 2 学校組織マネジメントの基礎として、学力向上を生み出すグランドビジョン（学校経営の基本）とその構造を理解する。
- 3 デザイニング・キャリア（将来に続く人生を、今、生きている）を意識する。
- 4 教師の職能向上と多忙性（悩む有能な教師）。
- 5 変化と成長を阻むものに向き合う重要性。

学校現場での課題について具体的な事例を挙げ、現在はそれらの解決に向けて、学校組織マネジメントを切り口として論点整理をしていく時期に来ているということであった。

絵を提示し、「これは何に見えますか。」と参加者に質問を投げかけ、「実は、うわばみが象を飲み込んでいる絵であるが、帽子、エアーズロックと回答してもよい、教師と子どもとの関係において教えることにこだわりすぎないほうがよい。教育は、自由と受容が大切であり、現在、『多様性』という言葉がよく使われるが、『多様性』で止まってはいけない、『多様性』を受容することが大切なのである」と示唆をいただき、教師として物事の捉え方について振り返りをすることができた。

先生たちへのアンケートの90%が、様々な悩みや壁について記述している現状があり、「人生において納得いかないこととどう向き合うか。」という課題については、ご自身の新任時代の苦しかった経験から、原点に戻る大切さについて語っていただいた。優れた教師は、お金ではなく、教師としての精神的な報酬（喜びややりがい）に満足しているという信念に基づいて、実践を重ねてこられたことについても伺うことができた。

人はその年齢になってはじめてわかることも多い。「自分は人生のどの段階を今、歩んでいるのか。」を意識することによって使命・課題が見えてくる。若い人たちの悩みや弱みに対する支援をどのようにしていくのか、大人の知性の3つの段階（若い人、ミドルリーダー、メタリーダー）によってお互いに高めていける関係を創っていききたいという貴重なお話もしていただいた。



今回、第3分科会は、参加者がそれぞれの立場から、若い教師やこれから教師を目指そうとしている学生たちにどのようにかわり、支援をしていったらよいのかについて学ぶことができ、有意義であった。

（文責：町田 陽子）

■第4分科会 「ICT活用によるアクティブラーニングの実践

～立命館守山中学校・高等学校の授業から学ぶ～

講師：辻 大樹 氏（立命館守山中学校・高等学校 英語科教諭）

坂 一平 氏（立命館守山中学校・高等学校 家庭科教諭）

第4分科会は、立命館守山中学校・高等学校の学校概要の説明から始まった。そして、アクティブラーニングにICTがどのように役立つのかを説明された。ラーニング・ピラミッドをもとに、「何を知っているか」から「何ができるのか」へ、カリキュラム中心から学習者中心へ、講義型から実体験・議論・実践中心の授業へ移行することが大切であり、その橋渡しとしてICTが有効であることを話された。

そして、立命館守山へのICT導入の4年間の経緯が説明された。2013年度から立命館守山の特色を出すためにICTの導入が検討された。2014年度には中学校1年生、高校1年生の生徒に1人1台タブレット端末(iPad)が配布された。保護者からもいろいろな反響があったが、これを無駄にしないように教師は取り組んだ。イノラボと協同で「RICS」の開発着手や「Classi」の導入、公開授業など様々な取組を経て、2016年には全校生(約1400名)がiPadを所有するようになった。「ICTを活用した特別な授業」は、今や「ICTを日常的な学びの武器として活用する授業」へと変化を遂げつつあるということであった。

次に、ICTを活用して授業と生徒はどう変わったのかについての話があった。生徒へのインタビューをもとにして生徒はICTを活用した授業を肯定的に受けとめていること、逆にIpadを用いることの危険性についても言及された。さらに、立命館守山の英語授業においてICTをどのように使用しているのか、その様子をビデオを見せながら説明された。



最後に、「ロイロノート」というソフトを使用した家庭科の模擬授業を体験させていただいた。「キュウリとわかめの酢の物を作る」という想定のもと、インターネットで作り方を検索したり、きゅうりの板づりの様子をまねて動画で提出したり、育児相談への回答を交流したりと様々な体験をさせていただいた。受講生はICTを用いた授業の可能性を実感することができたようである。

最後のアンケートも「ロイロノート」を使用したものであった。この分科会に参加して「非常に有意義であった」と回答が88%、有意義であったが12%であった。授業の各パートに関するアンケートもすべて高評価の内容であった。

(文責：井上 雅彦)

■第5分科会 「一人で抱えないで！～子どもと保護者と教師の幸せを願って～」

講師：井上 政嗣 氏（雲雀丘学園小学校 教諭）

溝淵 誠太郎 氏（豊中市立少路小学校 教諭）

第5分科会では、「一人で抱え込まないで ～子どもと保護者と教師の幸せを願って～」として、集まった現役の学生や若手、ベテランの教員など参加者が自分の経験したことをざっくばらんに暖かい雰囲気の中で交流を深め、活発な分科会となりました。

さいころトークで、各グループごとに子ども・保護者で困っていること、職業病、教師という職業へのイメージなど、それぞれがそれぞれの立場で感じていることを交流しました。その中で、ベテランの先生方から具体的な事例で子ども・保護者への対応の仕方についてアドバイスをいただきました。また、教師という仕事のやりがいとは何か、また担任として何がやりたいのかなど、教師として生きていく中で核になっていく部分に迫るようなお話もありました。また、小学校の教員は特に、1年間で子どもの成長を考えてしまう傾向があるけれども、目の前ではなくもう少し先を見通して子どもと関わっていくことが大切だとお話があり、自分自身の教師としてのあり方を改めて考えさせられる機会にもなりました。

そして、最後には全体で、「教師としての幸せを願って」について、溝淵先生や井上先生から、日々忙しい生活が続く中で、教師というのは職業の一つであり、ライフワークとして、教師として、一人の人間としてどのように生きていくべきか考え、あまり無理しすぎず、まずは自分を大切に生きていくことが大切であると語られました。日々忙しい中で、あまり実践や思いを交流することが難しいなかで、本日の分科会はとても有意義な場になったと思います。

（文責：青木 志帆）

